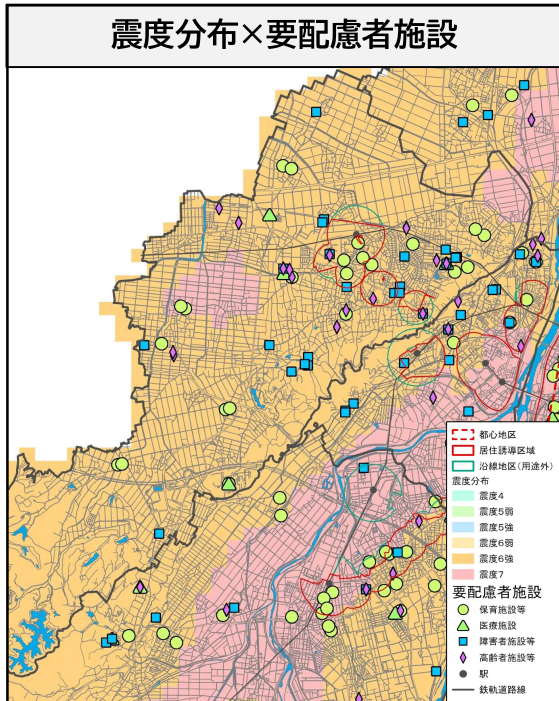
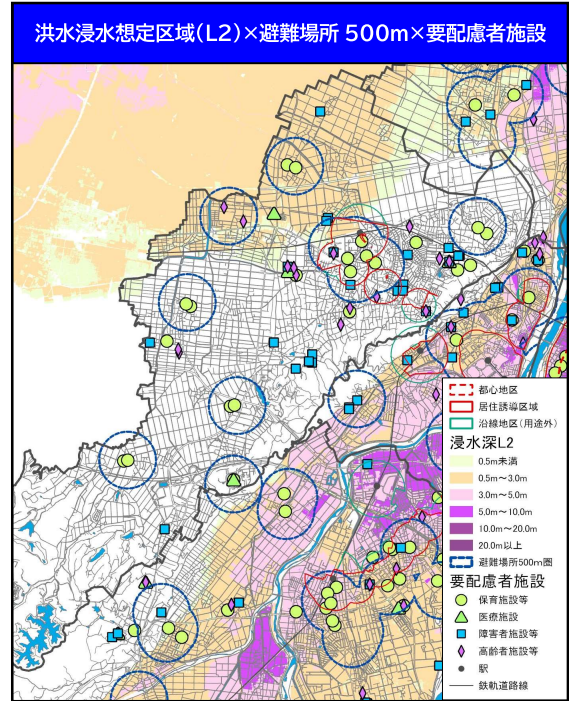


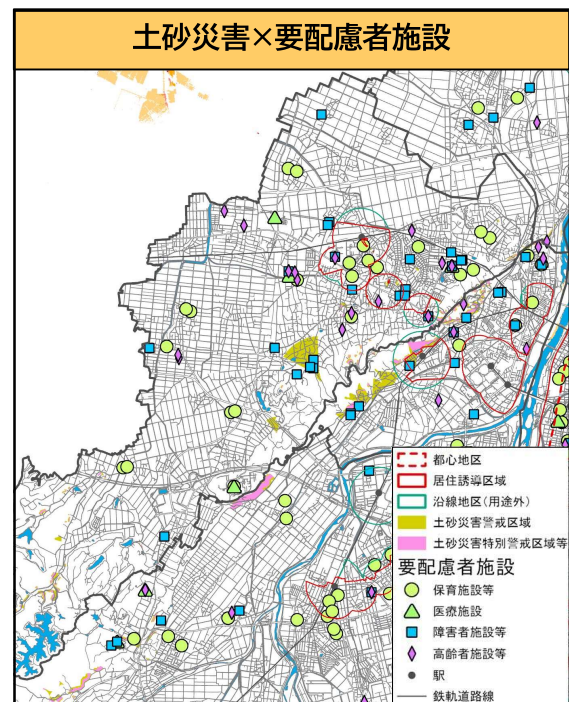
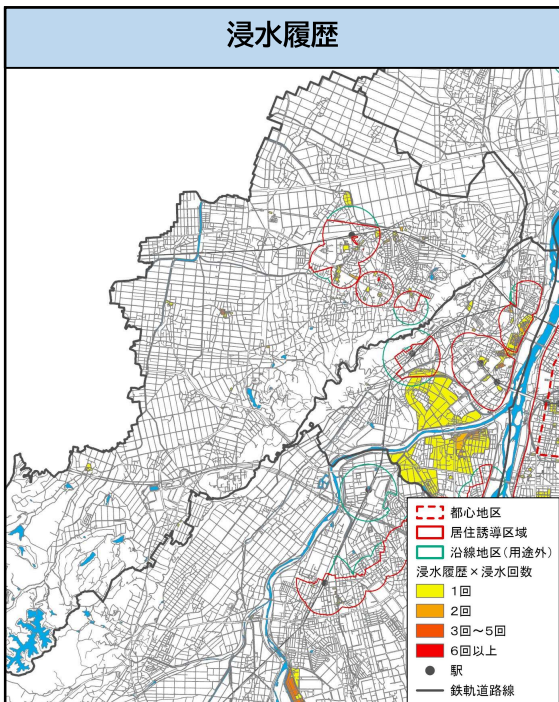
4) 呉羽地域



全域が震度6強以上であるため、要配慮者施設では、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。

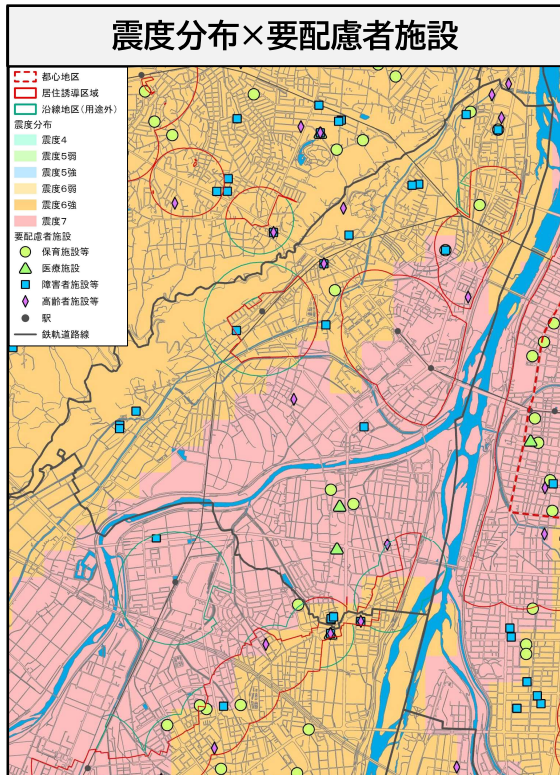


浸水深が 0.5m以上である地域の北部では、要配慮者利用施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。

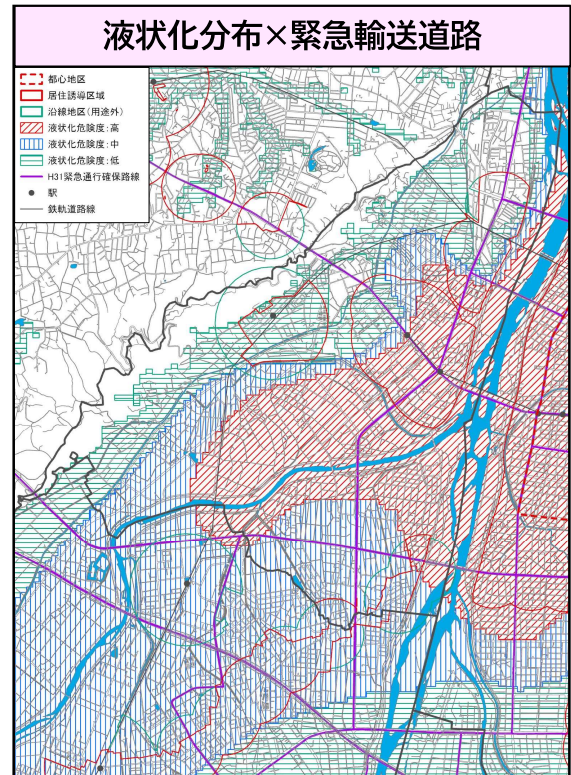


土砂災害警戒区域には、障害者施設が立地している

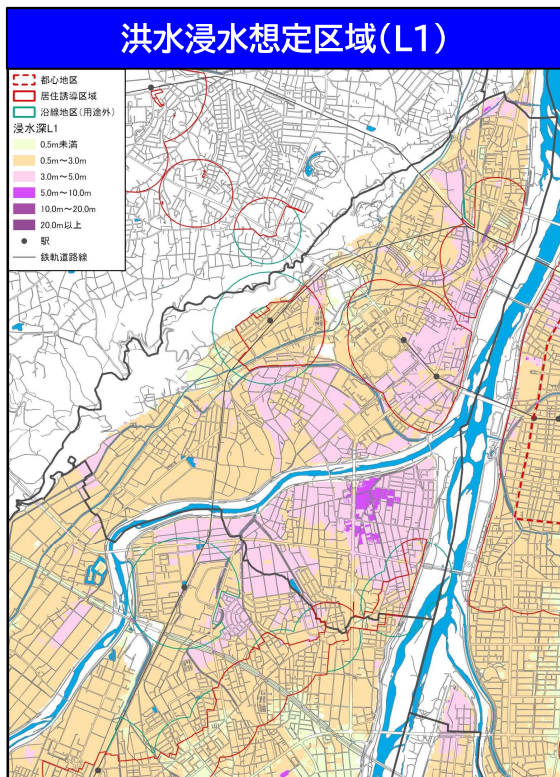
5) 富山西部地域



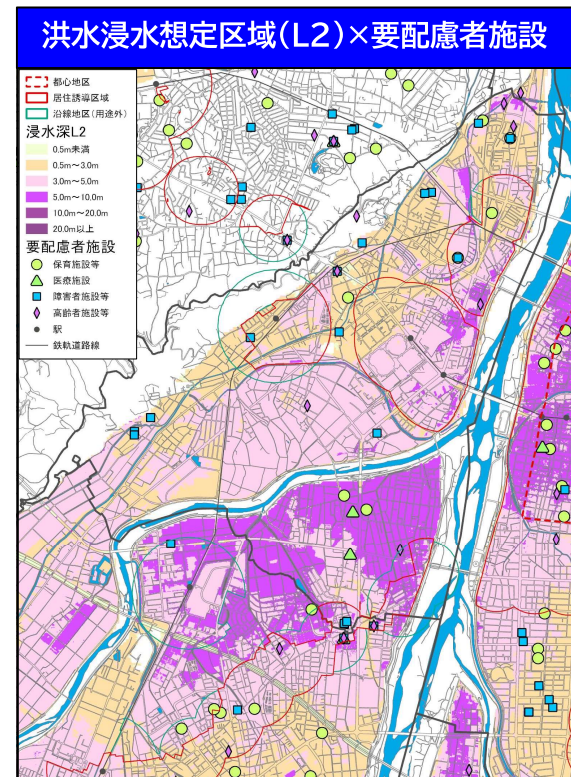
全域が震度6強以上であるため、要配慮者施設では、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。



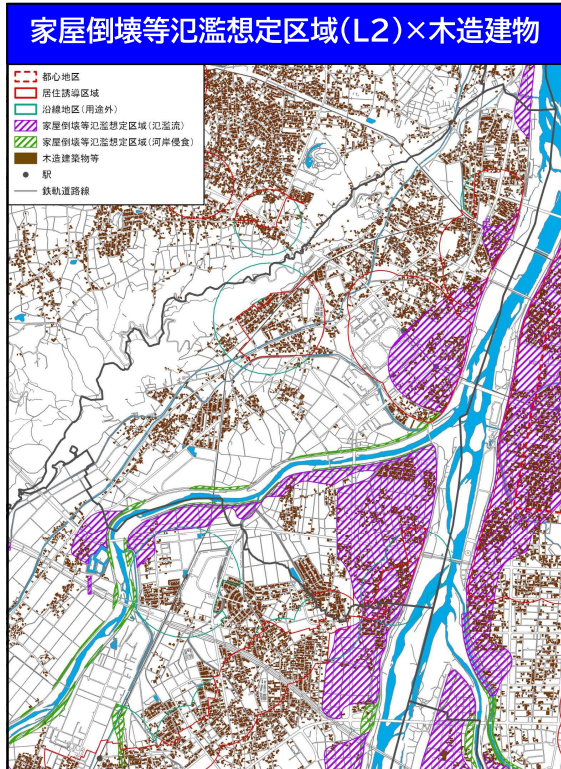
液状化危険度が高い区域に緊急輸送道路が設定されており、マンホール等の浮上による、機能不全などのおそれがある。



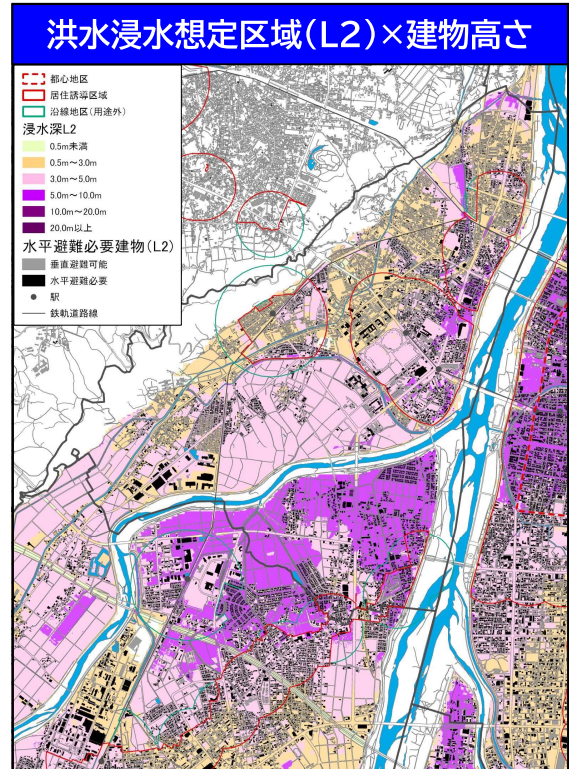
地域ほとんどは、浸水深が 0.5m以上であり、大半の建物で床上浸水が発生するおそれがあるほか、浸水深 3m以上の区域も広がっている。



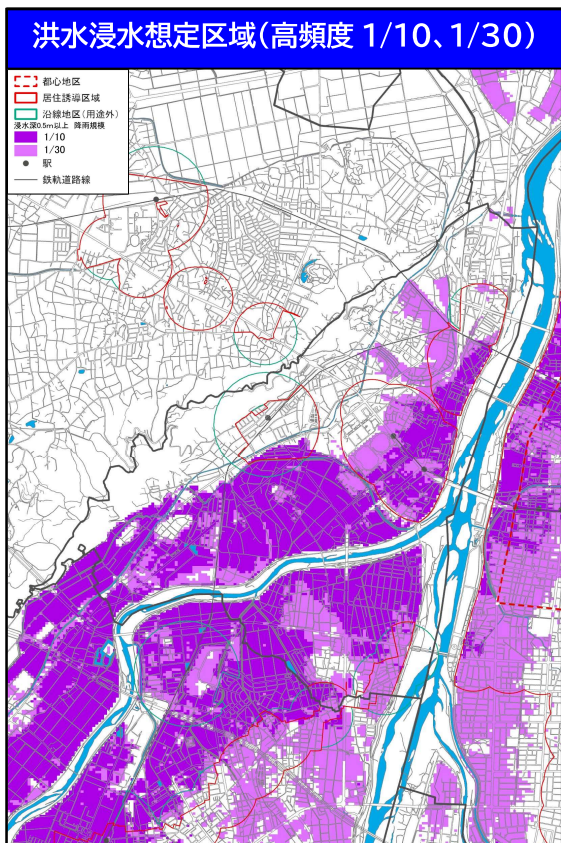
要配慮者施設が分布しており、浸水時に施設にとどまり、エネルギーや食糧等の備蓄がない場合は孤立化するおそれがある。



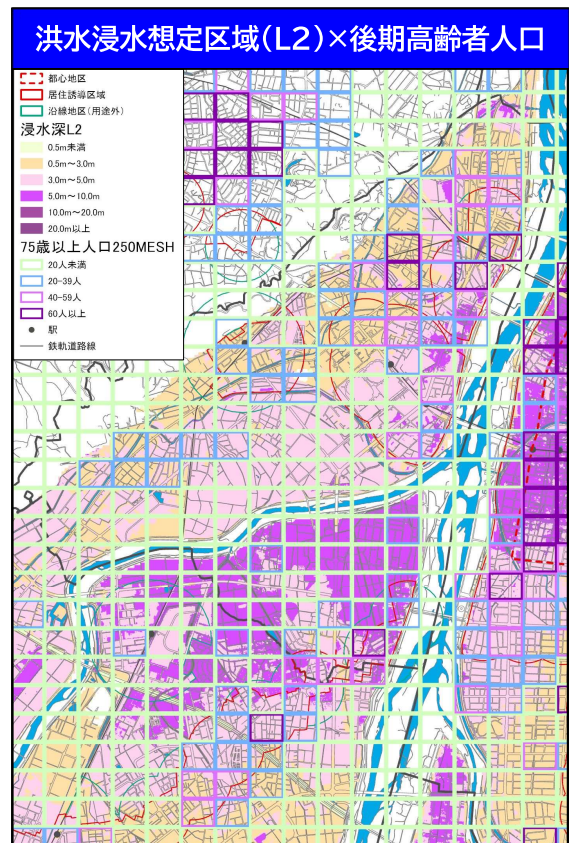
木造家屋が流出・倒壊するおそれがあるため、非木造建物への垂直避難や区域外への水平避難が必要である。



地域の大半が浸水深 3.0m以上であるため、平屋などの垂直避難困難な建物が面的に広がっている。

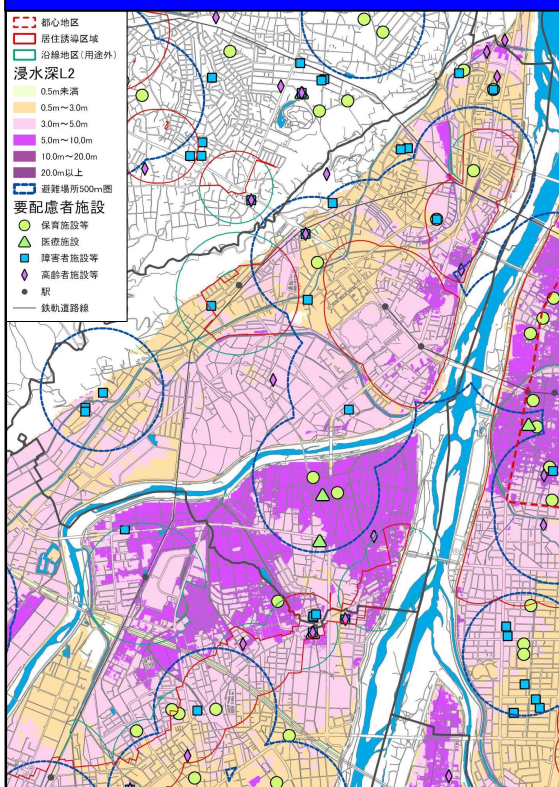


震度7の都心地区及びその周辺では、要配慮者施設が集積し、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。



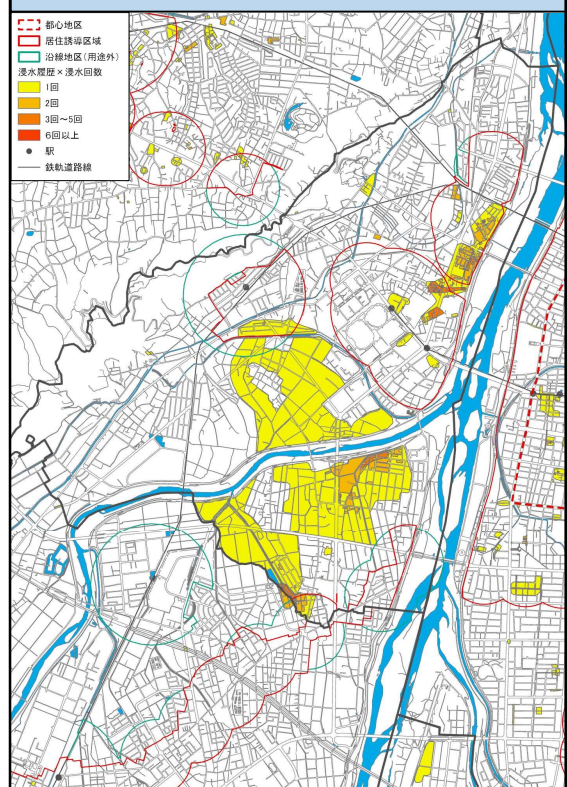
震度7の都心地区及びその周辺では、要配慮者施設が集積し、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。

洪水浸水想定区域(L2)×避難場所 500m×要配慮者施設



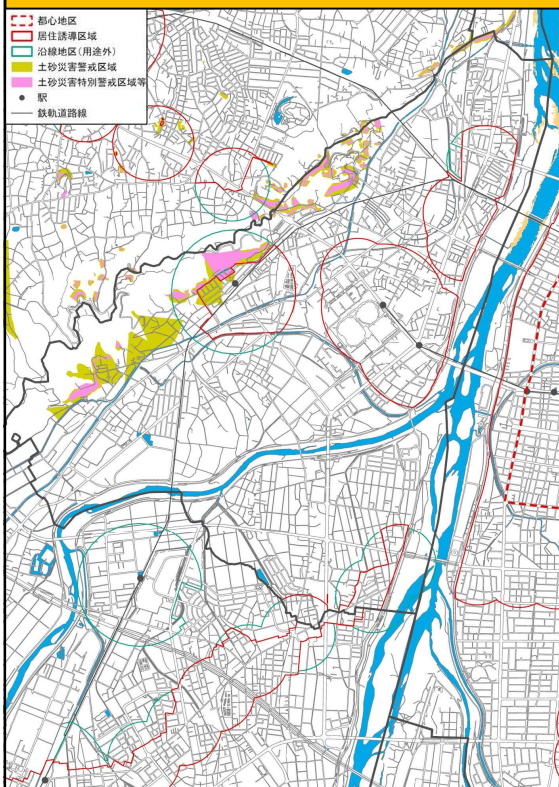
浸水深が 0.5m(1 階床上浸水程度)以上の区域で、洪水時指定緊急避難場所から離れている(500m以上)地区が一部あり、逃げ遅れのおそれがある。

浸水履歴



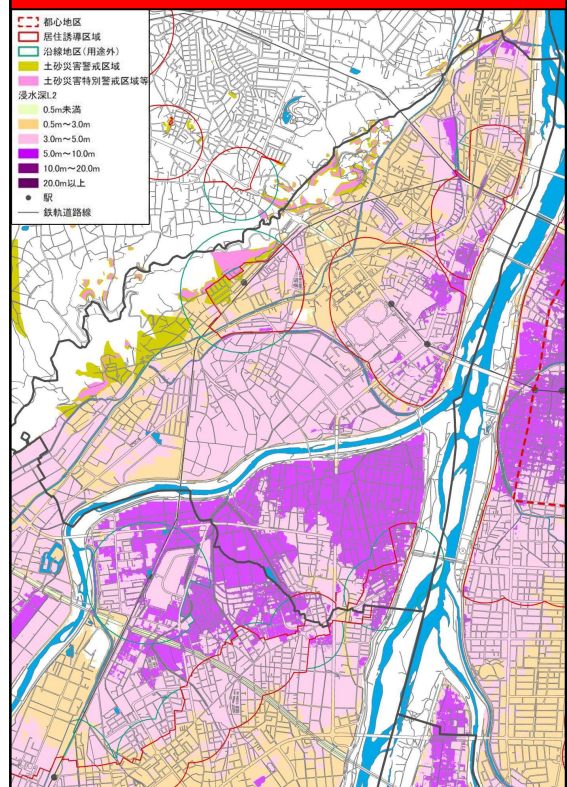
これまででも、面的な浸水被害が発生している。

土砂災害



呉羽丘陵において、土砂災害警戒区域や土砂災害特別警戒区域が分布している。

洪水浸水想定区域(L2)×土砂災害

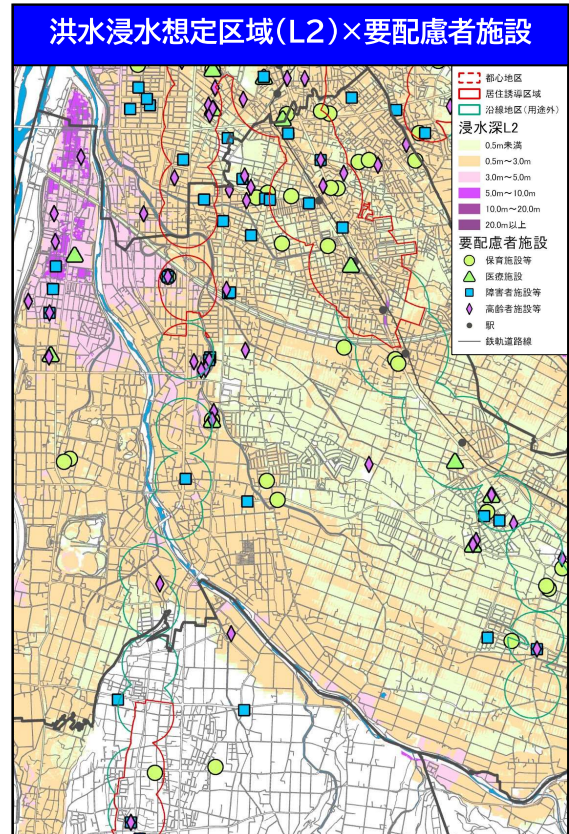


呉羽丘陵があることに加え、地域の大半が浸水深 3.0m以上であることから、複合災害のリスクがある。

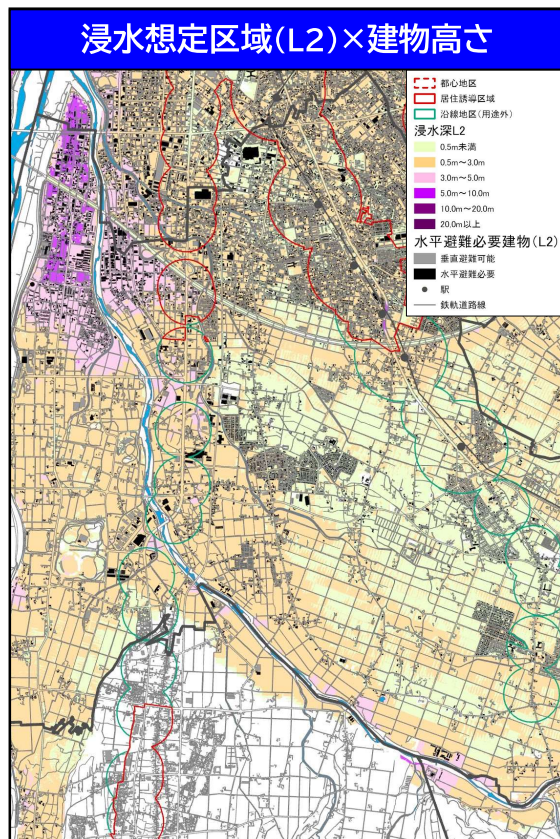
6) 富山南部地域



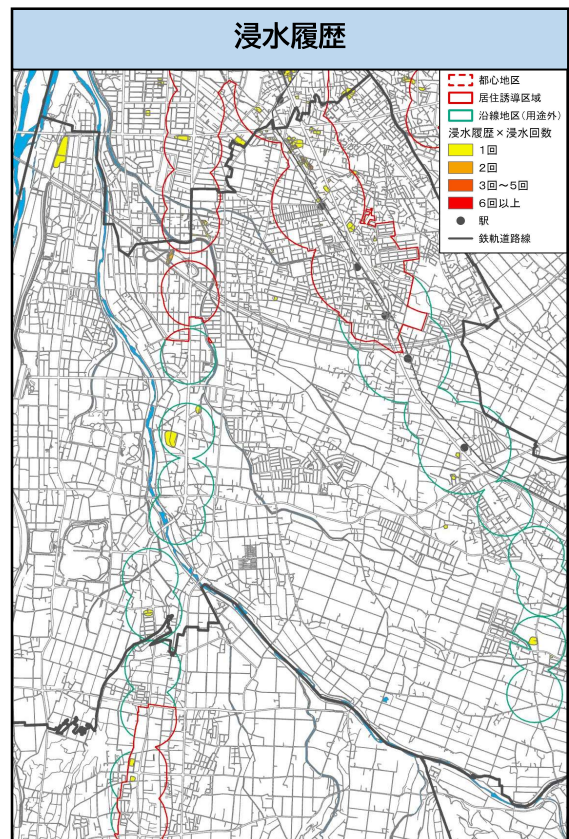
地域の大半が震度6強あるため、要配慮者施設では、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。



地域の大半が浸水深 0.5m以上である中、要配慮者施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。

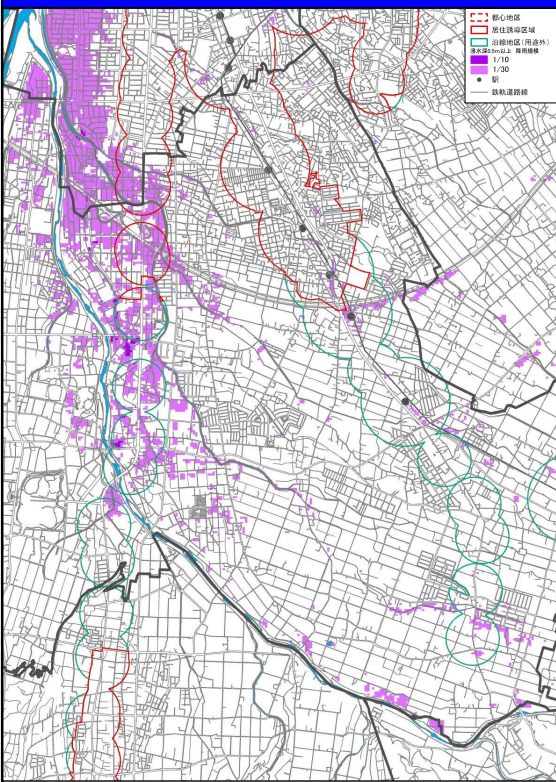


地域の大半が浸水深 0.5m以上であるため、平屋などの垂直避難困難な建物が分布している。



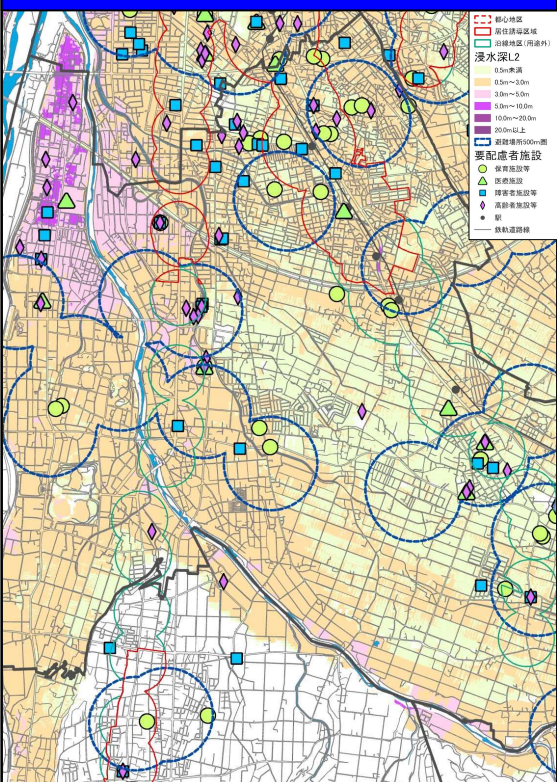
地域の大半が浸水深 0.5m以上であるため、平屋などの垂直避難困難な建物が分布している。

洪水浸水想定区域(高頻度 1/10、1/30)



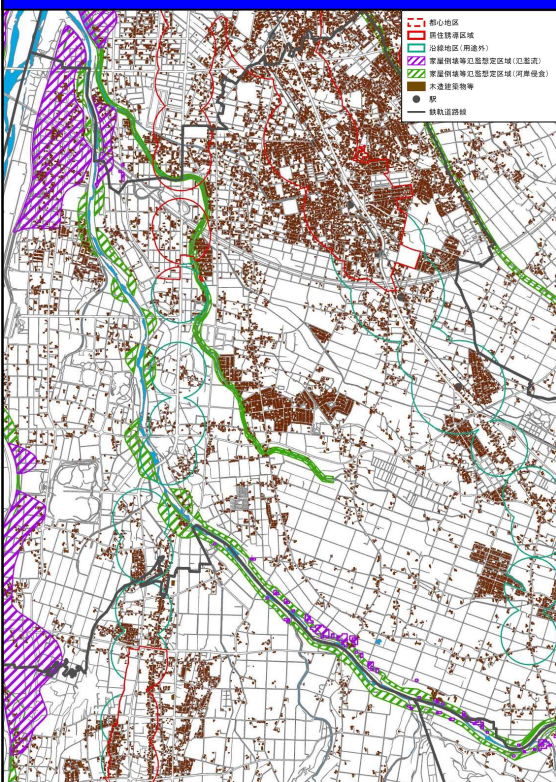
地域のおお半が浸水深 0.5m以上である中、要配慮者施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。

浸水想定区域(L2)×避難場所 500m×要配慮者施設



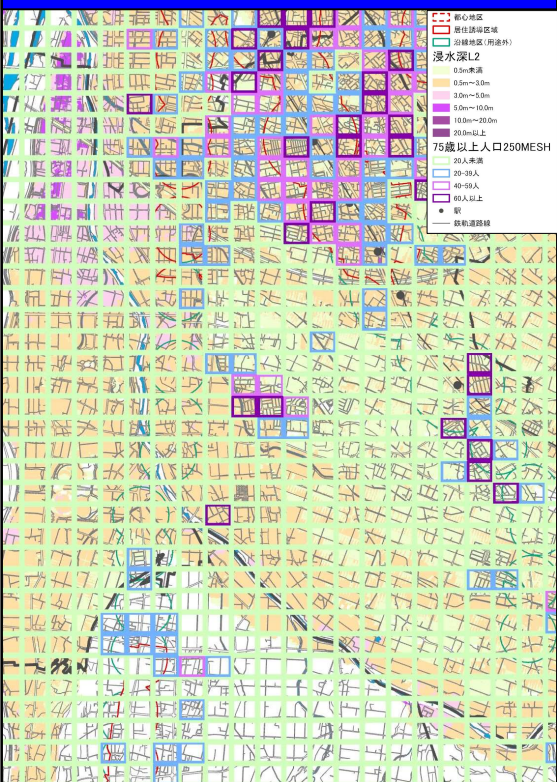
地域のおお半が浸水深 0.5m以上である中、要配慮者施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。

家屋倒壊等氾濫想定区域(L2)×木造建物

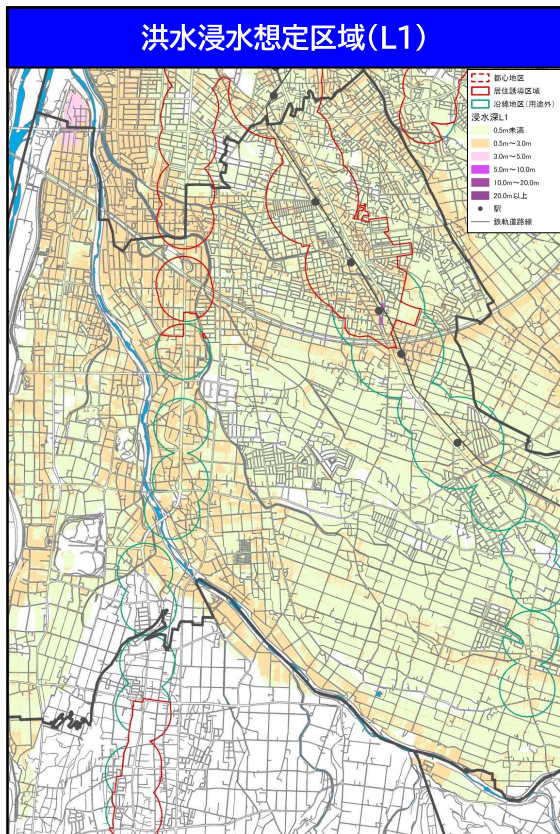


家屋倒壊等氾濫想定区域(氾濫流)では、木造家屋が流出・倒壊するおそれがあるため、非木造建物への垂直避難や区域外への水平避難が必要であるが、家屋の集積は見られない。

洪水浸水想定区域(L2)×後期高齢者人口

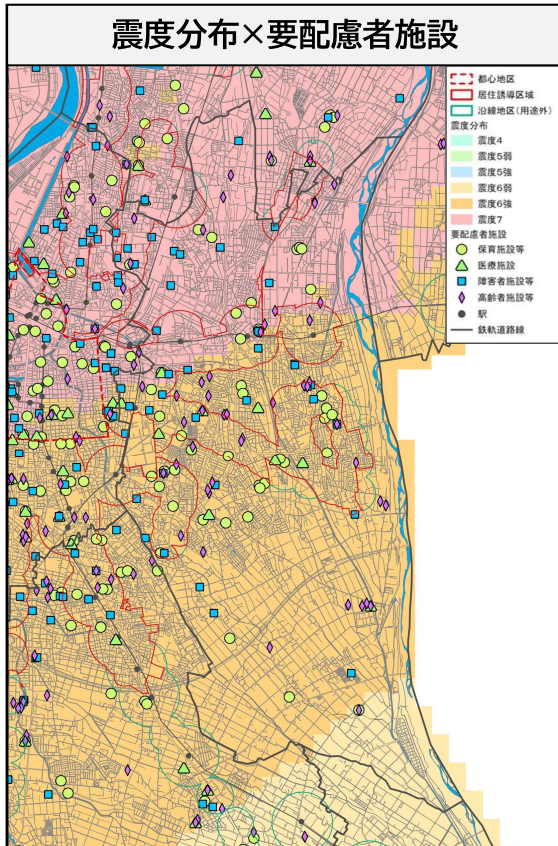


浸水深 0.5m以上となっている地鉄上滝線沿線では、今後も人口増加が見込まれる。

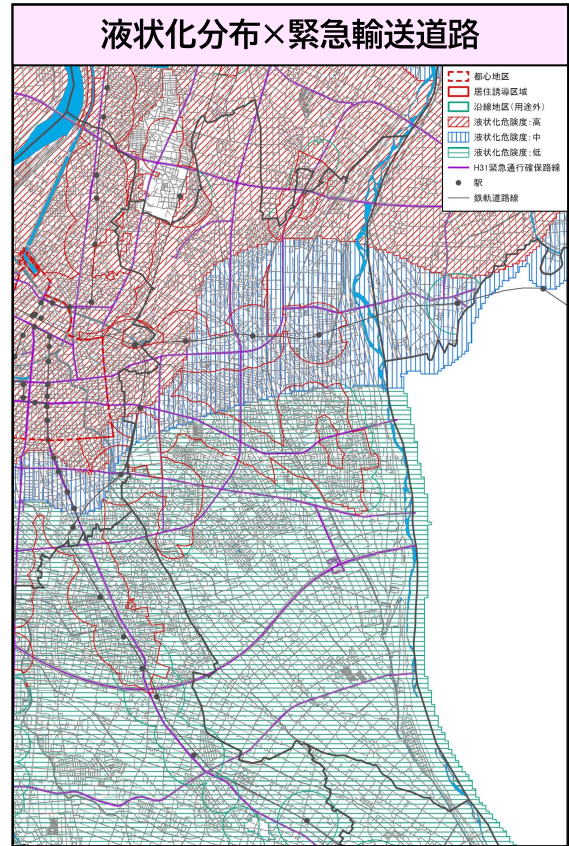


神通川やいたち川沿いは、浸水深が0.5m以上であり、大半の建物で床上浸水が発生するおそれがある。

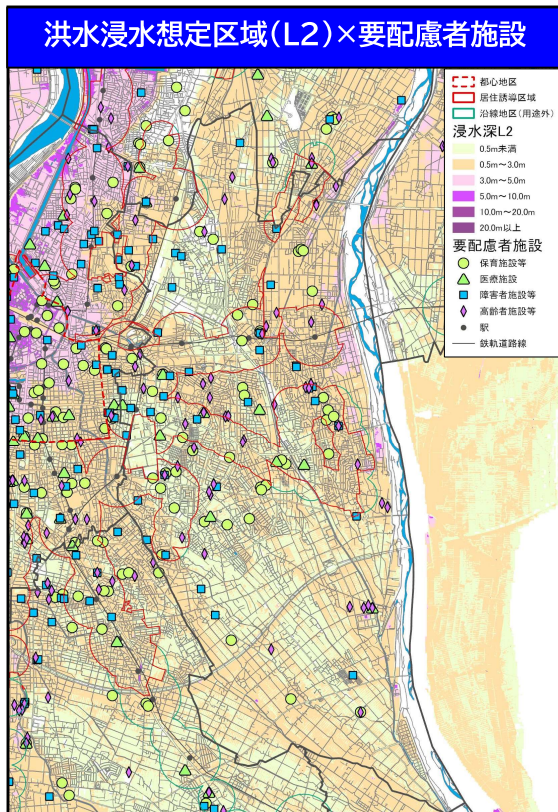
7) 富山東部地域



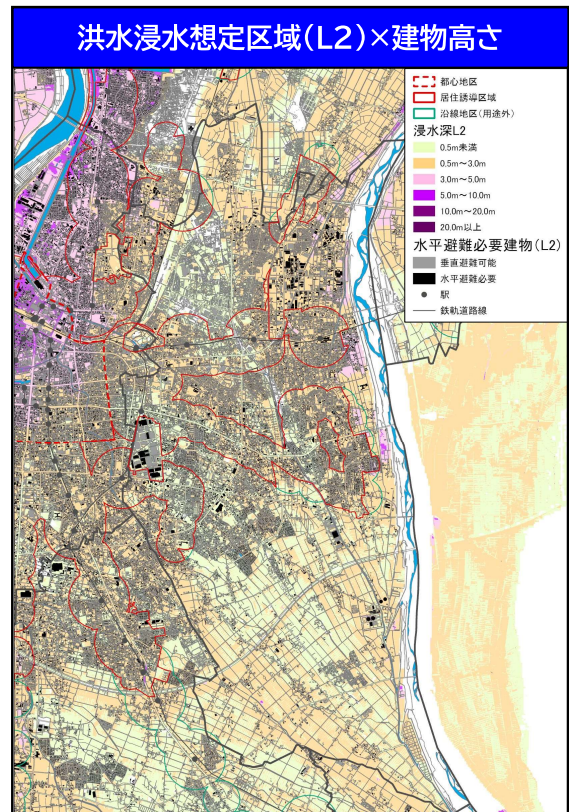
地域のほぼ全域が震度6強以上であるため、要配慮者施設では、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。



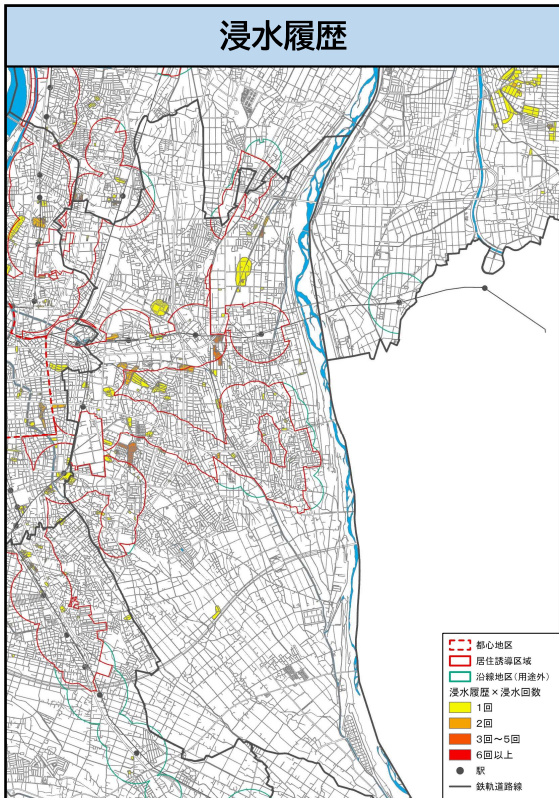
液状化危険度が中以上の区域では、緊急通行確保路線への液状化被害のおそれがある。



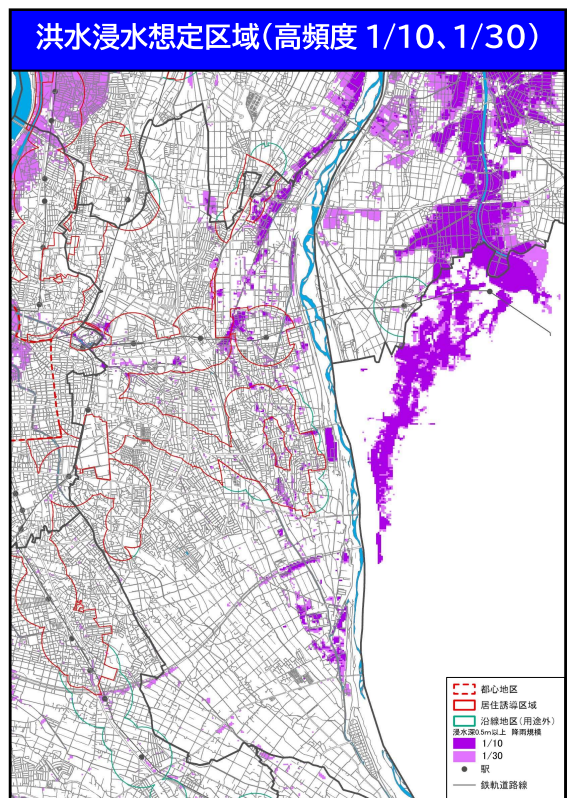
浸水深0.5m以上の地区では、要配慮者利用施設が分布しており逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。



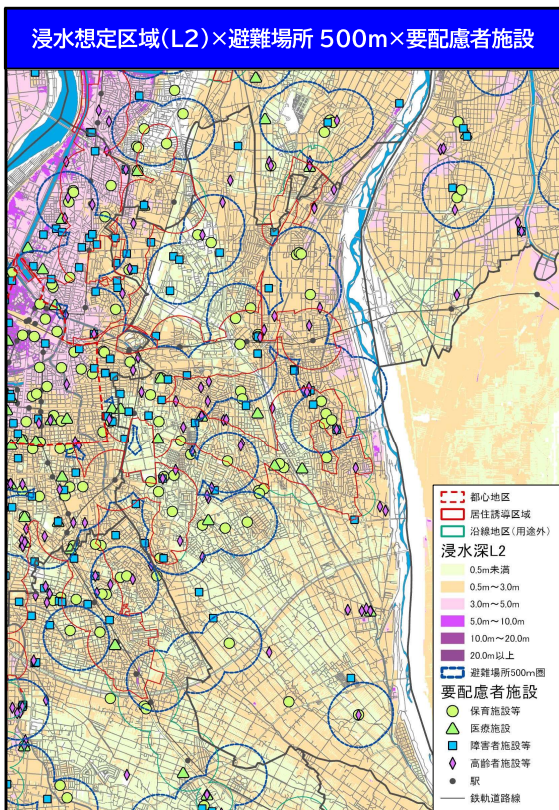
地域の大半が浸水深 0.5m以上であるため、平屋などの垂直避難困難な建物が分布している。



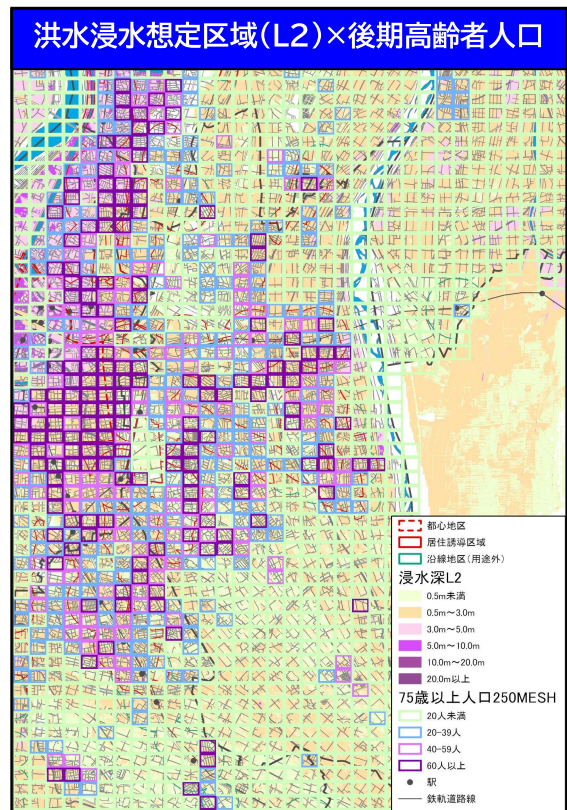
浸水履歴のある区域に、要配慮者施設の立地が見られるが、立地数は少ない。



浸水履歴のある区域に、要配慮者施設の立地が見られるが、立地数は少ない。

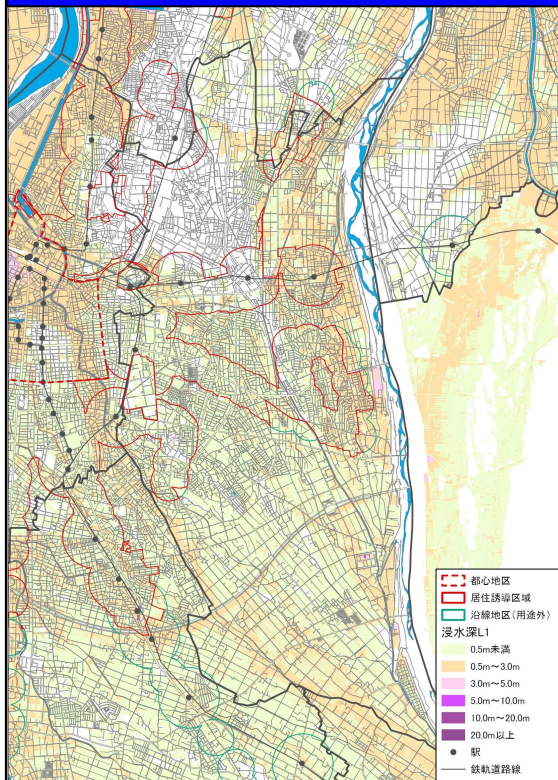


バス路線の居住誘導区域では、浸水深が 0.5m(1 階床上浸水程度)以上の区域で、洪水時指定緊急避難場所から離れている(500m以上)地区が一部あり、逃げ遅れのおそれがある。



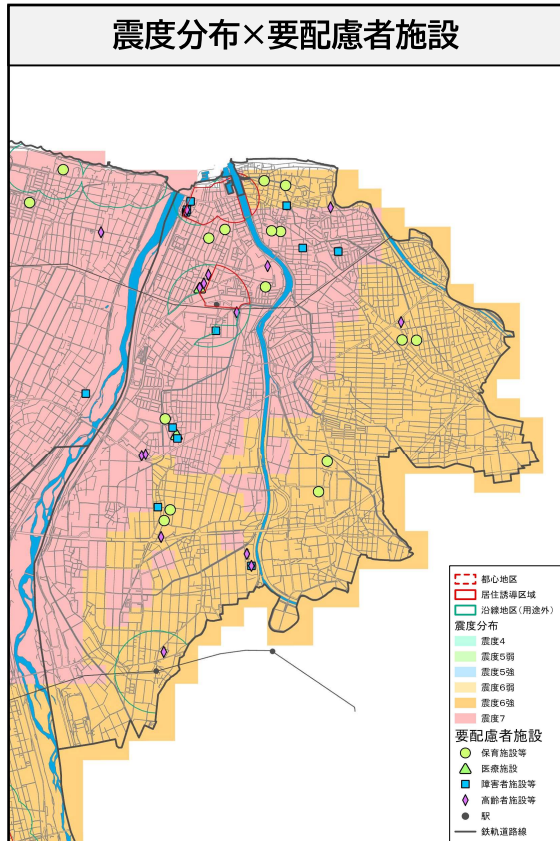
浸水深 0.5m以上となっている地鉄本線やバス路線沿線では、今後も人口増加が見込まれる。

洪水浸水想定区域(L1)

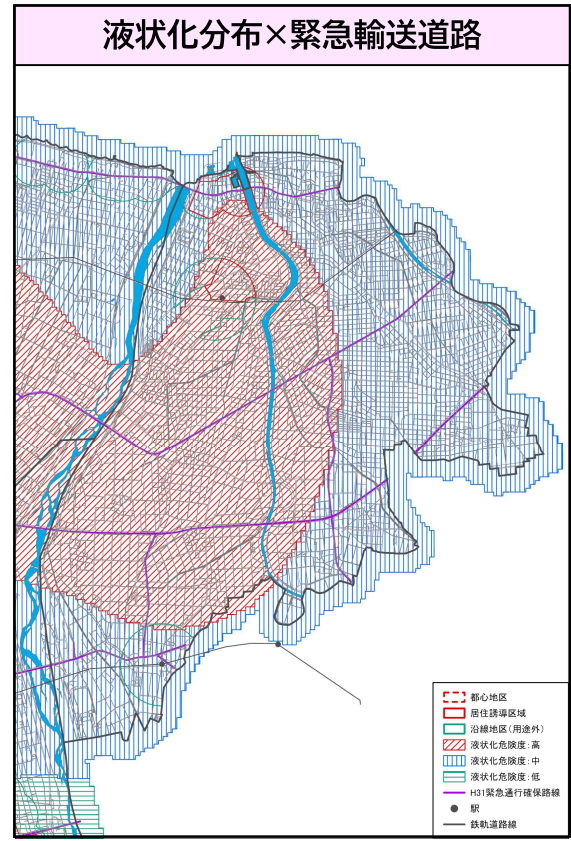


神通川やいたち川沿いは、浸水深が 0.5m以上であり、大半の建物で床上浸水が発生するおそれがある。

8) 水橋地域



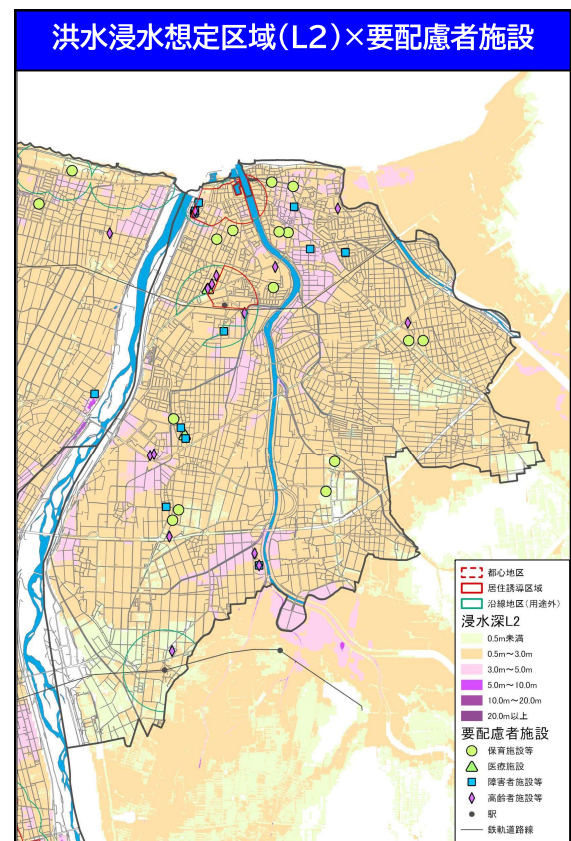
全域が震度6強以上であるため、要配慮者施設では、避難時に補助が必要となる人が多いと想定される。



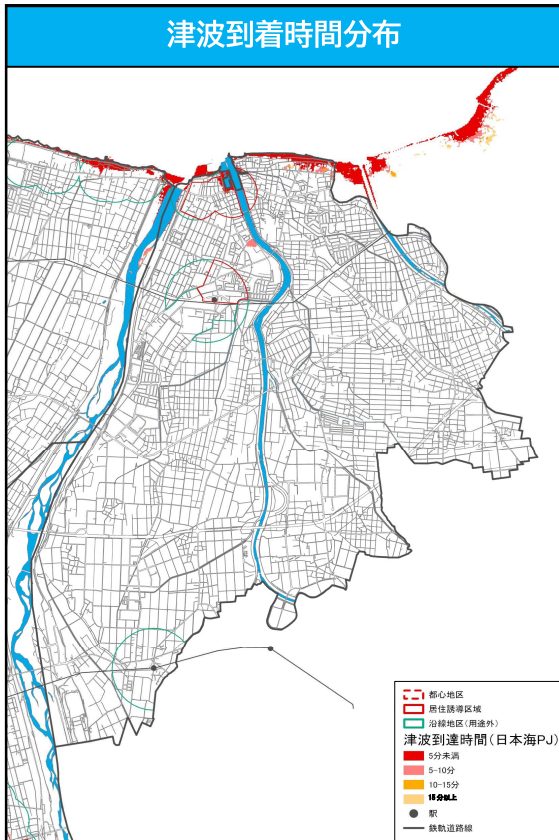
液状化危険度が高い区域では、緊急通行確保路線への液状化被害のおそれがある。



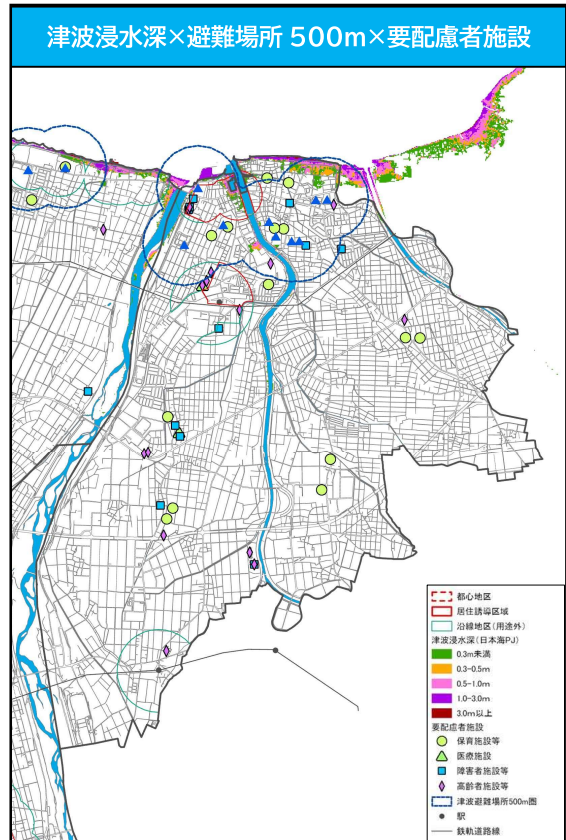
常願寺川や白岩川沿いは、浸水深が0.5m以上であり、大半の建物で床上浸水が発生するおそれがある。



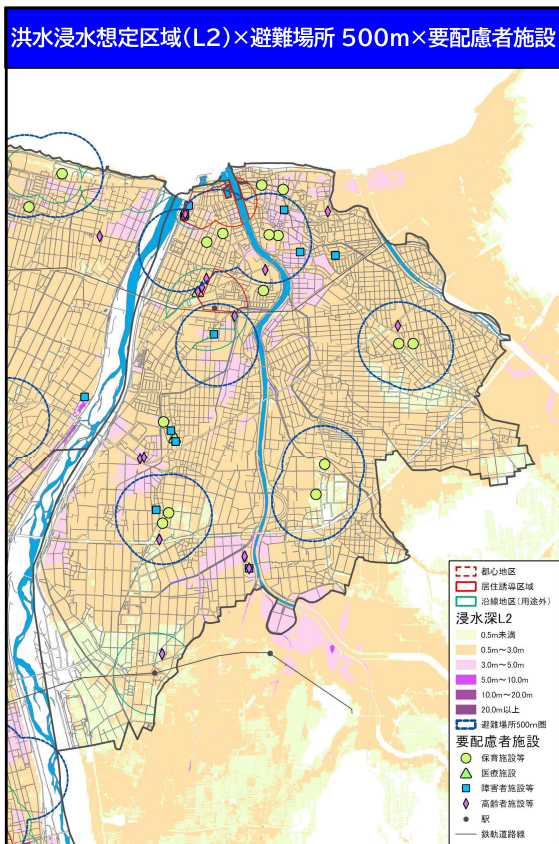
地域のほとんどが、浸水深0.5m以上の区域で、要配慮者施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。



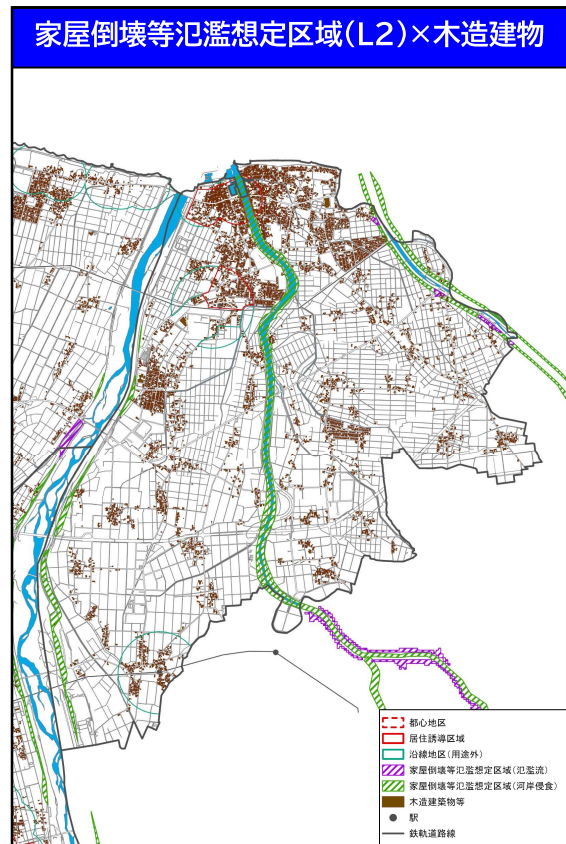
津波浸水深 30 cm以上の到達時間は、5分未満である。



津波浸水深 30 cm以上の到達時間は、5分未満である。

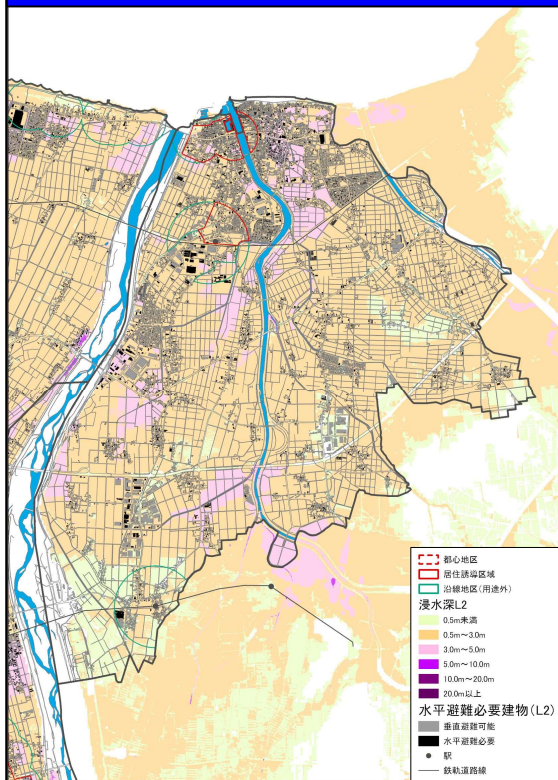


浸水深 0.5m以上の区域では、要配慮者利用施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。



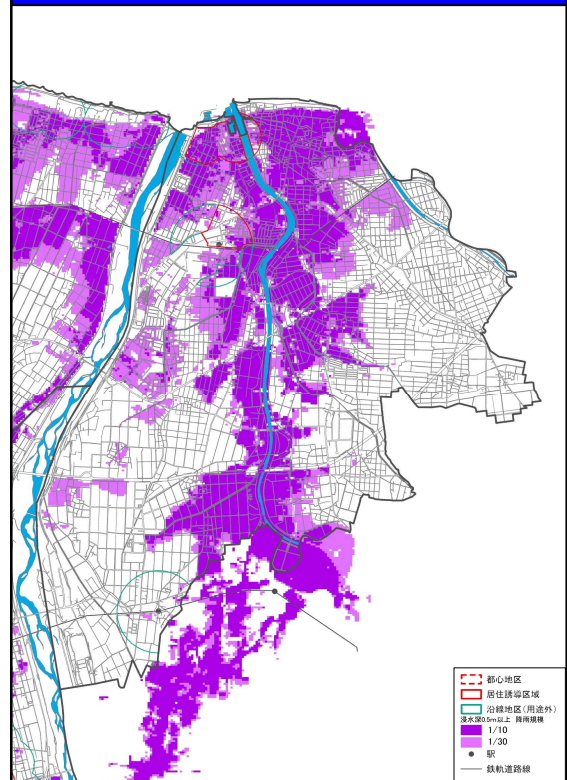
常願寺川沿いは家屋が少ないが、白岩川沿いの市街地は木造家屋が多い。

洪水浸水想定区域(L2)×建物高さ



地域のほとんどは、浸水深が0.5m以上であり、平屋などの垂直避難困難な建物が分布している。

洪水浸水想定区域(高頻度 1/10、1/30)



浸水深0.5m以上の区域では、要配慮者利用施設が分布しており、逃げ遅れによる被害が発生するおそれがある。